

大学生諸君へ



鈴木雄雅
大学生の常識《新潮選書》
11月16日発売

野中ともよ

(のなか・ともよ ジャーナリスト)

「君たちは何のためにここへ来たの!？」

ある大学での講義の壇上、語気を荒げ、また私はこう叫んでいた。新入生約二〇〇人を前にした、年に一度の講義である。開始からまだ五分と経っていないのに、集中力を欠き、眼が死んでいくフレッシュマンたち。何が起きたのか、すぐには理解できないようだ。

実は、これは例年通りの儀式なのである。厳しい受験戦争をくぐり抜け、安心感から脱力状態の彼ら、彼女らに対する最初のメッセージ。大学合格は最終目的ではなく、あくまでスタートではないことを知って欲しいのだ。それを本当に理解してもらえたか、多少不安は残るが……。

鈴木雄雅さんによる本書には、そんな現代大学生の「生態学」が鋭い考察とともに克明に記されている。講義中に携帯電話の着メロが鳴り、私語は止まず、授業料がムダになる休講を喜び、アルバイトを理由にゼミを欠席——学級崩壊と何も変わらない、こうしたイメージを、大学生に対して抱く人は少なくないだろう。それは真実なのか? 虚像なのか? 日頃、学生を相手に格闘し続けている教授にしかわからない、彼らの真の姿がここにはある。

かつて大学は、TQC(総合的品質管理 total quality control)の機能をもつ機関として、高度

経済成長期の日本を支えた。エラーをはね、矯正し、規格通りの人員を出荷する。学歴はバーコードのように瞬時に学生を振り分け、彼らを社会に送り出した。当時はそれで十分だった。

だが、そのシステムは人員を供給するだけで、決して人材は生み出さない。経済が上向きの時代には対応できるが、そうでなくなれば実に脆い。九〇年代前半からの「失われた一〇年」で、その脆さが露呈したのは誰もが認めることだろう。

本書が指摘するように、「大学に入れば、それでいい」という考えはもう捨てよう。同じ過ちを繰り返してはならない。日本の社会・経済が弱体化し、二〇世紀のパラダイムが音を立てて崩れている今こそ、学生は客観的に自分を見つめ、実力をつけ、それを発揮するチャンスだと気づくべきなのである。

同じキャンパスで共に学生時代を過ごした、鈴木さんがこうした本を書かれたことを、私はとても頼もしく思う。本書をきっかけに、同じ教育関係者には大学の役割をもう一度考えていただきたい。例の講義に私を担ぎ出して下さった先生から、嬉しい話を聞いた。

「野中さん、今度就職が決まった学生の中に、あなたの檄が効いた者がいましたよ。あの叱咤があったからこそ、勉強も頑張れたそうだ」